

高子二十境

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-----------|-----|-------|-------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 二十 | 十九 | 十八 | 十七 | 十六 | 十五 | 十四 | 十三 | 十二 | 十一 | 十 | 九 | 八 | 七 | 六 | 五 | 四 | 三 | 二 | 一 |
| 古樵丘 | 白雲洞 | 愚公谷 | 禹父山 | 雩山 | 白鷺峰 | 走馬嶺 | 返照原 | 拾翠崖 | 不羈坳 | 高子陂 | 隱泉 | 狸首岡 | 將歸阪 | 歸雲窟 | 採芝崖 | 龍脊巖 | 長嘯嶺 | 玉兔巖 | 丹露盤 |
| (扈從山) | (瑠璃窟) | (可樂澤) | (蔚遲山) | (請雨山) | (羽黑峰) | | (遍照原·日刺原) | | (的場坳) | (鷹雛陂) | (赫連泉) | | | | | | | | |



霸陵

丹巖高突兀

たんがんたか
とつこつ
丹巖高くして突兀

沈澗滴雲寒

こうがいくも
したた
沈澗雲に滴りて寒し

借問孤標勢

しゃもん
こひよう
借問す孤標の勢い

何如承露盤

しょうろばん
いか
承露盤に何如ん

切り立つ赤肌の巖が、空に高く突き出す。

夜半の露気が雲間から滴り、寒い。

すくつと孤立する勢いのある巖は、

武帝の建章宮の露を受ける承露盤に比べてどうだろうか。

※沈澗：・仙人が飲むという朝露。(楚辞 遠遊)

※承露盤：・漢の武帝が長安の建章宮に立てた高さ二十丈の銅製の柱。露を受ける仙人掌という

玉杯をささげた像。(文選)

亭亭丹露盤

ていてい たんろばん
亭亭たり丹露盤

紫巖高百丈

しがんたか ひやくじょう
紫巖高きこと百丈

上有雲表露

うえ うんびょう つゆあ
上に雲表の露有り

不讓金狄掌

きんてき てのひら ゆず
金狄の掌に譲らず

すくつと立ち聳える丹露盤。

幽玄な巖は、高く百丈もある。

盤上は、雲間から滴る露に濡れる。

始皇帝の咸陽宮の夜露を受ける金狄像の掌にも負けはしない。

※金狄ノ掌・秦の始皇帝が咸陽宮に十二の臣人を金で鑄造した像の一つで、女真族の金像でその掌で露を受ける。

盤谷

一入青山路

ひと せいざん みち はい
一たび青山の路に入れば

幽徑接巒岫

ゆうけいさんがん せつ
幽徑巒岫に接す

每發紫霞興

しか きよう はつ ごと
紫霞の興を発する毎に

幾過丹露盤

いく よ たんろばん
幾たびか過ぎる丹露盤

青く樹木が茂る山路に踏み入れれば、

奥深い静かな小路は、鋭く尖って聳える巖に辿り着く。

紫の霞がなびくという仙境はどんなどころかと思うたびに、

いつのまにか、丹露盤に足を向けている。

○参考漢詩… 楚辞「九歎」。

二 玉兔巖ぎよくとがん



霸陵

把酒仙巖上

さけ と せんがん うえ
酒を把る仙巖の上

天風玉兔寒

てんふうぎよくとさむ
天風玉兔寒し

醉來肱臥處

よ きた こうが ところ
酔い來りて肱臥する處

誤作月中看

あやま げつちゅう かん な
誤りて月中の看を作す

人里から離れた静かな巖の上で、杯を重ねて酒を飲む。

空に風が吹き、玉兔巖は寒い。

酔って肘を枕に寝ていると、ふと、

月の中で光景を見ているのかと、思い違いをしてしまう。

○参考漢詩… 李白 七言古詩「把酒問月」。

玉兔憑雲立

玉兔雲に憑りて立つ

携樽好醉歌

樽を携えて好し醉歌するに

不論吳質事

吳質が事を論ぜず

且欲問嫦娥

且つ嫦娥を問わんと欲す

玉兔巖は、雲に寄り添うように聳え立つ。

酒樽を持って巖に登り、酔っては歌うのもまた楽しい。

月で豎琴の調べを聞いたという吳質のことは論じないが、

月の精で美女の嫦娥よ、「二人で淋しくないか」と、聞いてみたい。

※吳質：・豎琴の名人・李憑が弾くとその調べは宇宙にこだまする。吳質がその調べを月で桂樹

に寄りかかりながら聞き惚れるという故事。(李賀 七言古詩「李憑の箏篋の引」)

※嫦娥：・月世界に住む伝説上の美女。「嫦娥奔月」の故事。(後漢書 淮南子 覽冥訓)

盤谷

颯颯清風夕

颯颯たる清風の夕

還登玉兔巖

還りて登る玉兔巖

悠然回首處

悠然と首を回らす處

明月照松杉

明月松杉を照らす

颯颯と涼しげな風が吹いている夕方に、

風雅な景色を眺めてみようよと、また、玉兔巖に登る。

巖の上から、ゆつくりとあたりを見回すと、

明月が、松や杉の樹木を美しく照らしている。

三 長嘯嶺 ちようしやうれい



霸陵

嶺頭長嘯罷

れいとうちようしやう
嶺頭長嘯し罷めて

却憶蘇門岑

かえ おも
却つて憶う蘇門の岑

半嶺重長嘯

はんれい
半嶺にして重ねて長嘯すれば

自成鸞鳳音

おのずか らんほう
自ら鸞鳳の音を成す

嶺の頂で長嘯するのをやめ、

蘇門山の阮籍や孫登のことを憶いながら、嶺を下る。

嶺の中腹に来たところで、また、長嘯する。

阮籍が鸞鳳の鳴き声かと聴いた孫登の長嘯のように、声が嶺に響いた。

※蘇門ノ岑・・・湖南省の蘇門山。阮籍や孫登などの竹林の七賢人が隠棲した山。

※鸞鳳ノ音・・・蘇門山で阮籍が孫登と別れて山の中腹まで下った時、孫登の長嘯する声が聞こえたが、それは鸞鳥や鳳凰の鳴き声のように谷に響き渡った。(晋書 阮籍伝)

長嘯秋風晚

ちようしやう しゆうふう くれ
長嘯す秋風の晩

欲歸殊未能

かえ ほつ こと いま あた
帰らんと欲して殊に未だ能わず

嶺頭足幽意

れいとうゆうい た
嶺頭幽意足る

不復愧孫登

ま そんとう は
復た孫登に愧じず

秋風の吹く夕暮れに嶺に登り、長嘯する。

声ものびやかで好く、なかなか帰る気にはなれない。

嶺の頂から、音が幽玄な仙境に響き渡る。

蘇門山の孫登の長嘯にも恥じることはないだろう。

※孫登ニ愧ジズ・嵇康「幽憤記」に「愧孫登」の故事がある。

忽發阮公興

たちま げんこう きやう はつ
忽ち阮公の興を発して

長嘯上碧嶺

ちようしやう こんれい のぼ
長嘯して碧嶺に上る

不見蘇門客

そもん かく み
蘇門の客を見ず

悵然向人境

ちようぜん じんきやう む
悵然として人境に向かう

阮籍先生が、孫登の長嘯を聴いた故事のようにとの思いで、

長嘯しながら、濃い緑が美しい嶺に登る。

しかし、蘇門山に棲むような隠者に会うことはなかった。

気を落とし、淋しい思いで嶺を下り、麓の人里に向かった。

※阮公・・・公は尊称で、阮籍先生のこと。

○霸陵、台州、盤谷とも、蘇門山での阮籍と孫登の故事を典故にしている。

四 龍脊巖 りゅうせきがん



霸陵

峻巖不可行

しゅんがんい
峻巖行く可からず

如立飛龍脊

ひりゅう 脊に立つが如し

欲踏浮雲進

ふうん 浮雲を踏みて進まんと欲すれば

天風生兩腋

てんぷうりょうえき 天風兩腋に生ず

巖は高く険しく、歩いて行けそうにもない。

まるで、飛ぶ龍の背に立っているようで。

それでも、巖に立ち込める雲を踏んで、前に進もうとすると、

空を飛ぶ仙人になったように、天上の風が両脇に吹きあげて来た。

○参考漢詩： 莊子「逍遙遊」。

盧仝 古体詩「走筆謝孟諫議寄新茶」の「唯兩腋習習トシテ清風ヲ生スルヲ覚ユ」。

獨歩峻巖巔

どくほ しゅんがん いただき
獨歩す峻巖の巔

孤筇凌紫烟

こきょうしえん しの
孤筇紫烟を凌ぐ

忽疑立龍脊

たちま うたが りゅうせき た
忽ち疑う龍脊に立つかと

却憶葛陂仙

かえ おも かっぴ せん
却つて憶う葛陂の仙

高く険しい巖の頂を、ひとり歩く。

一本の竹杖をたよりに、たちこめる紫の靄をおしのけていく。

たちまち、龍の背に立ったのかと疑い、

杖を龍にした葛陂の仙人を憶い起こした。

※葛陂ノ仙・「投杖化龍」の故事。河南省の葛陂という湖で、仙術を学ぶ費長房が竹杖を投げ入れるとたちまち龍に化したという。(葛洪 「神仙伝」)

盤谷

獨坐龍巖上

どくざ りゅうがん うえ
独坐す龍巖の上

欲學駕龍人

がりゅう ひと まな ほつ
駕龍の人を學ばんと欲す

翠標如出脊

すいひょうせ いだ
翠標脊を出す如く

青苔似振鱗

せいたいらうご ふう りん
青苔鱗を振うに似たり

龍脊巖の上で、ひとり坐していると、

龍の脊に乗る仙人の神仙術を学びたいという気になってしまふ。

巖の上の緑松の枝葉は、龍が脊を出しているようで、

青い苔は、まさに、龍が鱗を振るっているようだから。

※駕龍ノ人・東晋の学者 葛洪のこと。神仙養導の法、鍊丹術などの神仙術を学んだ。

五 採芝崖 さいしがい



霸陵

雲崖依碧嶂

うんがいへきしょう
雲崖碧嶂に依る よ

好唱採芝歌

よ
好し採芝の歌を唱するに うた しょう

高臥長松下

こうが
高臥す長松の下 ちようしょう もと

留侯奈我何

りゆうこう
留侯も我れをいかんせん わ

雲に聳える断崖は、屏風のような青い嶺を背に切り立つ。

崖の上は、採芝の歌を唱するには、まことに良いところだ。

官に仕えない自由な身で、松樹の下でのんびり横になっている。

高祖に仕えた留侯張良とて、この私を官に仕えさせることはできまい。

※採芝ノ歌・・商山に隠れ棲んだ四人の老人（四皓）が作った楽譜の採芝操。（楽譜詩集 卷五十八 琴曲歌辞二）

※留侯・・漢の高祖の功臣張良のこと。商山に隠れた四皓を招聘した。（史記「留侯世家」）

丹崖採紫芝

たんがいしししょうと
丹崖紫芝を採る

行歌日欲暮

こうかひく
行歌日暮れんと欲す

茅廬猶咫尺

ぼうろなしせき
茅廬猶お咫尺

疑入商山路

うたが
疑うらくは商山の路に入るかと

赤い岩肌の崖で、香草の靈芝を採る。

日が暮れるので、歌いながら帰り路を歩いて行く。

茅葺きの粗末な我が家のすぐ近くまで来たときになって、

ふと、隠者の棲む商山に向う路を歩いているのかと、疑ってしまった。

※商山：・長安の南を東西に走る秦嶺山脈の一峰。高祖の招聘に応じず採芝の歌を作った四皓が隠棲した山。

※茅廬：・茅葺きの粗末な家で、自分の家を謙遜していう。(陶潜明「飲酒二十首其五」)

盤谷

幽崖殊可愛

ゆうがいことあい
幽崖殊に愛す可し

怪松生奇石

かいしょうきせき
怪松奇石に生ず

分雲獨往去

くもわ
雲を分けて獨往し去る

欲作採芝客

さいし
採芝の客と作らんと欲す

静かで奥深い崖の風情が素晴らしく、たまらなく好きである。

変わった枝振りの松が、珍しい形の石の上に生えている。

ちぎれ雲が、ひとつまたひとつと流れては、往き去っていく。

採芝崖の仙境で、隠者として生きていこうと思う。

六 歸雲窟 きうんくつ



霸陵

紛紛朝出岫

ふんぷん あした しゅう い
紛紛として朝に岫を出で

裊裊暮歸窟

じょうじょう くれ くつ かえ
裊裊として暮に窟に帰る

莫道雲無心

い なか くもむしん
道う莫れ雲無心と

須知待夜月

すべか し よる つき ま
須らく知るべし夜の月を待つことを

朝には、湧き立つように生き生きと洞穴を飛び出て、

暮れには、萎えてゆらゆらと洞窟に帰る。

雲は、何も望まずに、ただ洞窟から出ては帰って来るのではない。

夜とともに楽しく過す月を待っていることを知ってあげよう。

○参考漢詩… 李白「夢游天姥吟・留別 第二段」の「雲之君兮紛紛而來下」。

陶淵明「歸去來の辞・第一段」の「雲々無心ニシテ以テ岫ヲ出テ」。

曲肱幽窟裏

きよくこう ゆうくつ
曲肱す幽窟の裏

日夕意殊閑

にっせきいこと かん
日夕意殊に閑なり

不避歸雲至

きうん いた
歸雲の至るを避けず

欲乘明月還

めいげつ じよう
明月に乗じて還らんと欲す

幽玄な歸雲窟で、肱を枕にしてのんびりと寝ている。

夕暮れどきは、ことのほか、もの静かで長閑である。

いつのまにか、雲が帰えるころになってしまった。

月の明かりをたよりにして、もう、家に帰ろう。

※曲肱：・粗食を食べ、水を飲み、肘を曲げて枕とする。これまた楽しい。質素な日常の暮らしで、道を求めることに真の楽しみがある。(論語・述而第七「曲肱之樂」)

盤谷

窟中高枕臥

くつちゆうまくら たか
窟中枕を高くして臥せば

西嶺日将夕

せいれいひ
西嶺日はまさに夕べならんとす

飛鳥已宿樹

とぶとりすう
飛鳥已に樹に宿し

歸雲忽觸石

きうん
歸雲たちまち石に觸れる

歸雲窟の中で、枕を高くして、のんびり横になっていたが、

西の嶺のほうは、もう、日が暮れようとしている。

空を飛んでいた鳥は、すでに帰ってねぐらの樹に宿している。

帰ってきた雲が、たちまち立ち込め、洞窟の石を濡らしている。

七
将歸阪しょうきはん



霸陵

獨往将歸阪

どくおう しょうきはん
獨往す将歸阪

斜陽射亂山

しゃようらんざん
斜陽亂山を射る

村童沽酒去

そんどうさけ か さ
村童酒を沽い去り

野老荷鋤還

やろうすき にな かえ
野老鋤を荷いて還る

ひとり散策しながら、将歸阪にまで来てしまった。

夕陽が、高くまた低くと連なる山々を赤く射している。

村の童が、買った酒を手を持って坂を去り、

老いた農夫が、鋤をかついで家に還って行く。

相送将歸阪

あい おく しょうきはん
相い送る将歸阪

況逢揺落時

いわん ようらく とき あ
況や揺落の時に逢うをや

未擬江淹賦

いま こうえん ふ ぎ
未だ江淹が賦に擬せず

先成宋玉悲

ま そうぎよく かな な
先ず宋玉が悲しみを成す

帰る友を将歸阪まで見送り、別れた。

木の葉がひらひらと舞い散る秋に逢い、そして別れるとは。

江淹の詩歌のように、友との別れは悲しいが、

宋玉が詠うように、紅葉が枯れ落ちる秋の悲しみはさらに深い。

※江淹：六朝時代の文学者。「恨みの賦」「別れの賦」などが代表作品で、情感の描写主眼とする叙情詩を作る。(西史「江淹伝」)。

※宋玉：戦国時代末期の楚の宮廷詩人。作品「楚辞・九辯」の第一段「悲秋」：「悲シイカナ秋ノ気タルヤ 草木瑤落シテ変衰シ 将ニ帰ラントスルヲ送ルガゴトシ」。

盤谷

林下獨徘徊

りんか ひと はいかい
林下を独り徘徊すれば

清風已向晚

せいふうすで くれ む
清風已向晩に向かわんとす

鳥還欲落巢

とり かえ お ほつ す
鳥は還る落ちんと欲する巢

人行将歸阪

ひと い しょうきはん
人は行く将歸阪

山の林を、ひとり、ぶらりぶらりと散策を楽しんだ。

涼しげな風が吹き、あたりはもう、夕暮れに向かう。

鳥は、ねぐらの巢に還ろうと飛び落ちる。

人は、家路へと将歸阪を帰って行く。



霸陵

西岡採蕨薇

せいこう けつび と
西岡に蕨薇を採る

拳然似女手

けんぜん じょしゅ に
拳然として女手に似たり

松石亦斑然

しょうせき またはんぜん
松石も亦斑然

自堪歌狸首

おのずか りしゅう うた た
自ら狸首を歌うに堪えたり

館から西方の岡に登り、蕨と薇を採る。

拳のように丸く巻くその姿は、しなやかな女の手に似ている。

松樹と石が、狸のまだら毛模様のように岡に広がっている。

自然と、諸侯の射儀で歌う「狸首」の詩を口ずさんでしまう。

※拳然似女手・原壤が棺桶用の材木の上で「狸首之斑然 執女手卷然」と歌う場面がある。

(礼記「檀弓」下)

※狸首ヲ歌ウ・礼記「射儀」。射術の儀式で、矢を放つ間隔に楽を奏でた。天子の射儀では、官吏が良く務めを果たすことを喜ぶ「騶虞」の詩を、諸侯の時は、天子のために会えることを喜ぶ「狸首」の詩を奏でた。

不敢問騶虞

あえ すらぐ と
敢て騶虞を問わず

寧復論狸首

むし ま りしゅう ろん
寧ろ復た狸首を論ぜんや

春風登此岡

しゅんふう こ おか のぼ
春風此の岡に登る

但欲伴樵叟

た しょうぞう ともな ほつ
但だ樵叟に伴わんと欲す

天子の射儀で歌う「騶虞」の詩はどうしたのですかとは聞かずに、

むしろまた、「狸首」の詩について論じたいと思う。

風がのどかで、春の草木が息吹くこの岡に登り、

樵の翁と一緒に来て語り合いたかったと、懐かしく亡き父を憶う。

※騶虞：・騶はうまかい、虞は虎に似た獣の意。聖人の徳に感じて現れるという靈獣。生物を食わず、生草をふまないという。（詩経「召南」 第一章騶虞）

盤谷

迢迢狸首岡

ちようちよう りしゅうこう
迢迢たり狸首岡

盡日心目暢

じんじつしんもくのか
尽日心目暢

青山兼緑水

せいざん りよくすい か
青山と緑水を兼ね

西看復北望

せいかんま ほくぼう
西看復た北望

弧を描くように遠くにまで広がる狸首岡。

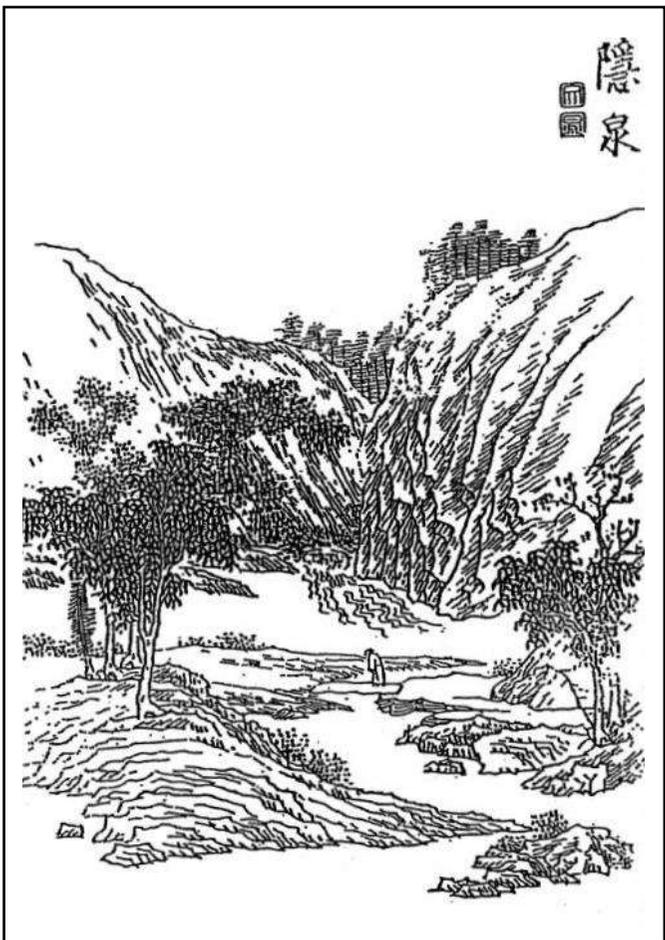
日よりも良く、心も眼もののびのびするように、長閑である。

青々とした山々は、樹影が映え、緑の湖水のように見える。

西方を、手をかざして遠くまで看ては、また、北方を、広く眺望する。

○この岡から、半田山が望め、高子沼が目に入る光景が窺える。

九 隱泉いんせん（赫連泉かくれんせん）



霸陵

悠悠千歲下

ゆうゆう せんざい 悠悠たり千歲の下

猶想二疏賢

な おも 猶お想う二疏の賢

為報功名士

ため ほう こうみやう 為に報ず功名の士

歸來酌隱泉

かえ き いんせん 歸り来たりて隱泉を酌めと

はるか千年の歲月を隔てた今、なお、

官を辞して郷里に帰った疏広と疏受の賢人を想い起こす。

いまや功名の士となっている我が子に告ぎたい。

官職を望まずに帰って来て、隱泉の水を酌むがいいと。

※二疏ノ賢・二疏散金の故事。漢の時代、疏広と甥の疏受が官を辞して故郷に帰り、天子から賜った金を親戚や友人に分け与えた故事。「足るを知る」の行いと称賛された。

（漢書）

○参考漢詩… 王維、網川二十境「金屑泉」。

聞道隱泉水

聞きくならいんせんくみず隠泉水の水

一斟忘好爵

一ひとたくびこうしゃく斟わすめば好爵を忘ると

若教周子飲

若もし周しゅうし子のをして飲のましめば

不復棄猿鶴

復またえんかく猿鶴すを棄すてず

隱泉の水は、一度、斟んで飲むと、

よい爵位や立派な官位などを忘れさせてしまうという。

周の儒学者周公旦にも、隱泉の水を飲ませれば、

官には仕えず、猿鶴を友とする隠者としてゆうゆうとしたであらうに。

※周子：周王朝を創始した兄武王の補佐役に徹し、周礼を定めた儒学者・周公旦のこと。

※猿鶴：朝廷に仕えないで隱棲生活をする人のたとえ。(宋史「石揚休伝」)

盤谷

隱泉在松下

隱いんせん泉しゅうか松あ下に在り

巢鶴在松上

巢そうかく鶴しゅうじょう松あ上に在り

松間人不知

松しょうかん間ひと人し知らず

明月自來往

明めいげつ月おのずか自ら來ら往ら

松樹の下には、隱水が湧いている。

松樹の上には、鶴の巢がある。

松の樹林には、人影もない。

明月が、ただ、昇り来ては、沈み往く。

十 高子陂 (鷹雛陂)
こうしひ たかすは



霸陵

春陂千萬頃

しゅんぱせんばんけい
春陂千萬頃

幾客得魚歸

いくかくうおえ
幾ばくぞ客か魚を得て歸る

高子知誰子

たかこしら
高子知んぬ誰が子ぞ

空留一釣磯

むなとど
空しく留む一釣磯

春の高子沼は、おだやかで広々としている。

どれほどの人が、魚を釣って帰るだろうか。

沼は高子という名だが、誰の子かは知らない。

いまは、誰一人いない高子の釣り磯が、ひっそりとしている。

○参考文献… 孟子「告子下」を典故とする阮籍「詠懷詩」を参照。「高子怨新詩」の故事。

春風高子陂

しゅんぷうこうしひ
春風高子陂

春水緑如酒

しゅんすいみどり
春水緑にして酒の如し

為問垂綸客

ためと すいりん かく
為に問う垂綸の客

得魚肯賣否

うお え がえん う いな
魚を得ば肯じて売らんや否や

春の風が、高子沼に吹いている。

若葉の緑に染まる水を、酒のように湛えている。

釣り糸を垂らす人に聞いてみよう。

魚が釣れたら売ってくれますか、どうですかと。

林間風嫋嫋

りんかんかぜじょうじょう
林間風嫋嫋

陂上月皎皎

はじょうつきこうこう
陂上月皎皎

此夕投竿人

こ ゆう さお ひと
此の夕べに竿を投ずる人

得魚知多少

うお え し たしやう
魚を得ることを知る多少ぞ

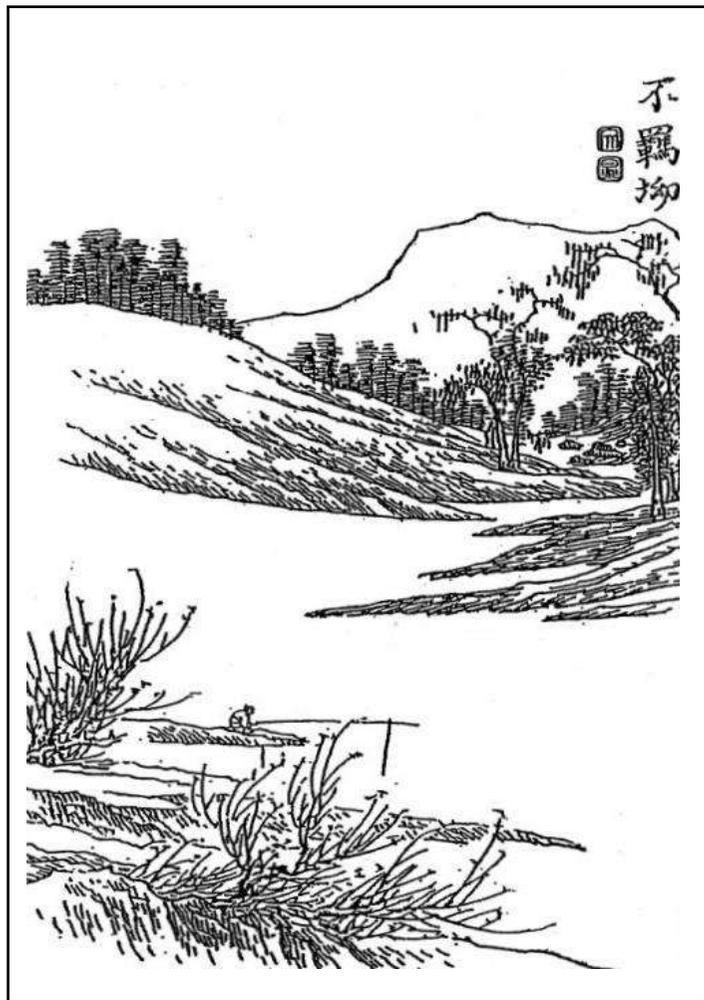
樹林の間を、やわらかい風がそよそよと吹いている。

沼の上には、月が白明るく輝いている。

この夕暮れに、釣り竿を投じている人がいるが、

いったいどれほどの魚を釣るだろうか。

○釣り人のいる春の高子沼を、覇陵はその夕暮れの情景を詠ったのに対し、台州はその昼間の、盤谷は夜の情景を詠い応じている。(小林敬一著「詩に詠まれた景観と保全」より)



霸陵

高臥不羈坳

こうが ふきおう
高臥す不羈坳

晚來殊未歸

ばんらいこと いま かえ
晚來殊に未だ帰らず

孤雲將獨鳥

こうん は びくちよう
孤雲と將た獨鳥

深映錦陂飛

ふか きんぱ えい と
深く錦陂に映じて飛ぶ

不羈坳に来て、世俗の煩わしさを忘れ、のんびりしている。

夕暮れどきだが、残照が美しく、まだ帰らない。

ちぎれ雲かと思つたが、一羽のはぐれ鳥が、

錦のように美しい沼に深く影を映して、飛んでいる。

獨坐青林裏

どくざ せいりん
裏のうち

開樽對緑陂

せん ひら
樽を開いて緑陂に對す

若論酒中趣

もし しゅちゅう
趣をおもむきろん

但有白鷗知

た はくおう
但だ白鷗の知る有り

ただひとり、青々とした林の中で坐り、

樽を開けて酒を飲み、緑に染まる沼を眺めている。

もし、酒盛りの最中の心地はどうかと論ずならば、

それは自由のびやかに飛ぶ白い鷗が知るであろう。

※白鷗：鷗は「欲心や邪心のない素直な心」の喩え。列子「黄帝編」の故事。

○参考漢詩… 王維 網川二十景第十七「竹里館」の「独り坐ス幽篁ノ裏」。

遅歩到林坳

ちほ りんおう
いた
遅歩し林坳に到り

高臥對山陂

こうが さんば
たい
高臥して山陂に對す

誰識此中客

たれ し こ
うち
かく
誰か識らん此の中の客

總不繼塵羈

そう じんき
せつ
総じて塵羈に繼せられざること

ぶらりぶらりと歩き、樹林の奥まった不羈坳に来る。

横になって、山の中に広がる沼にのんびりと向かい合う。

誰が知るであろうか、この不羈坳を訪れる人は、

皆、俗世間の煩わしさに縛られずに自由であることを。

○参考漢詩… 陶淵明「飲酒・其の八」の「吾生夢幻ノ間 何事ノ塵羈ニ繼ル」。

十二
拾翠崖 じゅうすいがい



霸陵

西岸投竿罷

せいがん さお とう や
西岸に竿を投し罷めて

北崖又獨立

ほくがい またひと た
北崖に又独り立つ

雲光與山翠

うんこう さんすい
雲光と山翠と

欲向鏡中拾

きょうちゆう む ひろ ほつ
鏡中に向かいて拾わんと欲す

沼の西岸で釣りをするのをやめ、

北の崖にひとり立ち、沼の美しい光景を眺めた。

雲から漏れる光が射し、山の翠が水面に映えている。

鏡のような水面からその翠を手で掬い、拾ってみたい。

※拾翠崖・杜甫 七言律詩「秋興八首・其の八」の「佳人拾翠春相問」。

丹崖俯緑陂

丹崖緑陂を俯す
たんがいはりよくは ぶ

弁木金碧集

弁木金碧集まる
きぼくきんぺきあつ

下窺天鏡裏

下も天境の裏を窺えば
した てんきょう うち うかが

彩翠眞堪拾

彩翠眞に拾うに堪えたり
さいすいしん ひろ た

赤い岩肌の崖の下には、緑の沼が伏せるように広がる。

まわり一帯に、黄金や青緑の美しい色彩りの草木が茂っている。

崖から下に、鏡のように澄んでいる沼を覗き見ると、

彩られて翠を、手で掬って、拾うことができるようだ。

○参考漢詩… 裴迪 網川二十景「金屑泉」の「金碧拾ウ可キガ如シ」。

○金碧山水図の山水画の様式を参考にしてか、赤、青、緑、金、翠、碧の色が鮮やかである。

盤谷

幽崖陂水上

幽崖陂水の上
ゆうがいはすい ほとり

異卉照波春

異卉波を照らして春なり
いきなみ て はる

吾將向鏡裏

吾れ將に鏡裏に向いて
わ まさ きょうり むか

拾翠贈佳人

翠を拾いて佳人に贈らんとす
みどり ひろ かじん おく

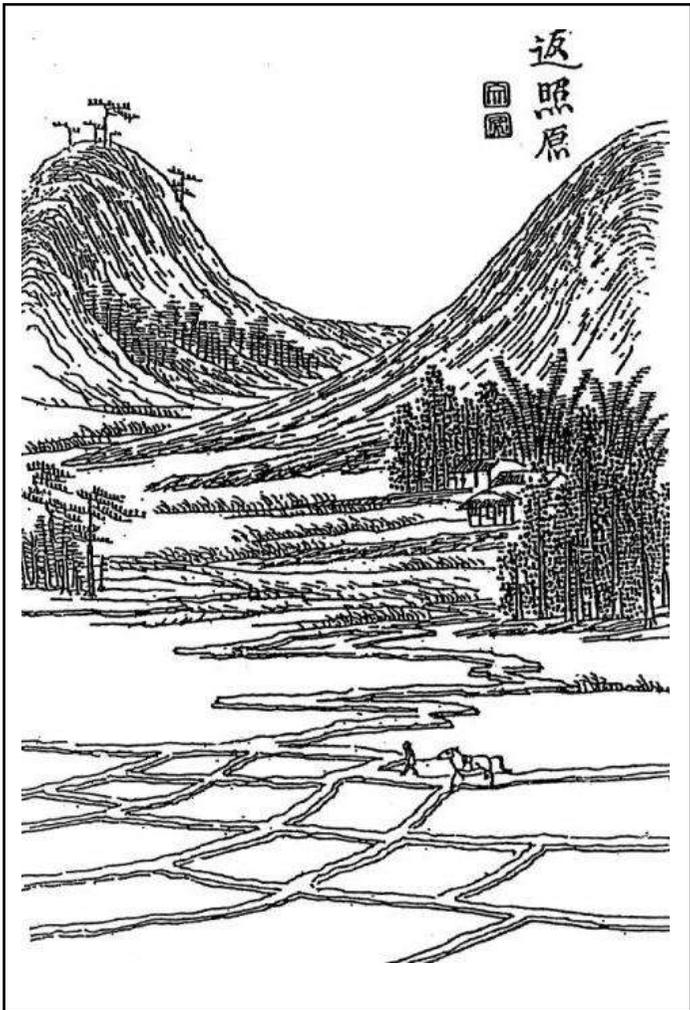
幽玄な崖が、沼のほとりに聳えている。

春の生え茂る草木の美しい彩りが、波を照らしている。

鏡のように彩りを映す水面から、

翠を手で掬い拾って、美しいあなたに贈りたい。

十三 返照原へんしょうげん（遍照原へんしょうはら・日刺原ひさしはら）



霸陵

率意歩春原

意いに率したがいて春原しゅんげんを歩ほし

途窮哭古廟

途窮みちきわまりて古廟こびやうに哭こくす

唯看薄暮色

唯ただ看みる薄暮はくぼの色いろ

孤霞與返照

孤霞こかと返照へんしょうと

気の向くままに、春の野原を歩いていると、

行きづまり、阮籍が古廟の前で慟哭したように、困ってしまった。

もう、あたり一面は、薄暮の色に染まり、

ぽつかりと浮かぶ夕焼けの雲と、夕陽が照り返す野原の光景が美しい。

※途窮哭古廟・「時ニ率意ニ独リ駕シ 径路ニ由ラズ 車跡窮ル所 スナワチ慟哭シ而シテ反ス」
の故事。（晋書「阮籍伝」）

春風采緑罷

しゅんぷうみどり と や
春風緑を采り罷めて

還吟招隱句

かえ ぎん しょういん く
還りて吟ず招隱の句

返景入芳原

へんけいほうげん い
返景芳原に入りて

復照王孫路

ま おうそん みち て
復た王孫の路を照らす

春の風が吹く野原で、草取りをやめ、

見晴らしの良いところで、楚辞の招隱の句を吟じた。

夕陽の照り返しが、若草が香る野原に美しく射し込み、

我が子が歩いて行つた王孫の路を照らしている。

※招隱ノ句・・楚辞「招隱士 淮南小山」の「王孫游_レビテ帰_{ラズ} 春草生_レジテ萋萋タリ」が有名
※王孫・・天子の子孫、白銀の鞍の馬に乗る遊蕩の若者のことで、ここでは、上方に出て行き帰
つて来ない我が息子のことと思われる。

○参考漢詩… 王維 網川二十景の五「鹿柴」の「辺景入深林 復照青苔上」。

盤谷

已倒玉壺罷

すで ぎょくこ たお や
已に玉壺を倒し罷めて

乗興恣遊討

きよう じよう ゆうたう ほしいまま
興に乗じて遊討を恣にす

原頭何所見

げんとうなん み ところ
原頭何の見る所ぞ

返景照春草

へんけいしゅんそう て
返景春草を照らす

白玉の美しい壺の中の酒を飲み干してしまい、

酒に興じて愉快に遊び、おおいに楽しんで過ごした。

高子の野原には、素晴らしい見る所がいったいあるのかというが、

夕焼けの残照が春の若草を照らしている美しい眺めがあるではないか。

十四 走馬嶺 そうまれい



霸陵

半嶺白雲起

半嶺白雲起る はんれいはくうんおこ

飛依走馬石

飛びて走馬石に依る と そうませき よ

安知白雲中

安んぞ知らん白雲の中 いずく し はくうん うち

不有乘龍客

龍に乗ずる客有らざることを りゆう じょう かくあ

嶺の中腹に、白雲がつぎつぎと湧き起り、

飛んでは、峠にある走る馬の姿をした石に依りかかる。

どうして、この白雲の中には

龍に乗る仙人はいないこと、誰が知るであろうか。

※白雲・雲は山の穴から生じるときれ、世俗を離れた自由の喩えともなる。

○参考漢詩… 李白「送友人入蜀」の「山ハ人面ヨリ起リ 雲ハ馬頭ニソイテ生ズ」。

台州

嶺頭有奇石

れいとう きせきあ
嶺頭に奇石有り

勢似龍馬走

せい りゆうま はし
勢は龍馬の走るに似たり

儻得神人鞭

も しんじん むち え
儻しくは神人の鞭を得ば

吾将致天廐

わ まさ てんきゆう いた
吾れ将に天廐に到らんとす

嶺の頂に、奇妙な形の石がある。

そのありさまは、龍の頭をした神馬の走る姿に似ている。

もし仙人の鞭を手にすることができたならば、

私は、龍馬に乗り、天廐という星に行くであろうに。

※龍馬：神馬のこと。「馬ノ八尺以上ヲ龍ト為ス」(周礼「夏官 𩇑人」)。

※天廐：天空の東壁の北にある馬の駅舎にあてられた星の名。(晋書「天文志上」)

盤谷

南登走馬嶺

みなみ そうまれい のぼ
南のかた走馬嶺に登り

北望王孫路

きた おうそん みち のぞ
北に王孫の路を望む

王孫猶未歸

おうそん な かえ
王孫猶おいまだ歸らず

惆悵攀桂樹

ちゆうちよう けいじゆ よ
惆悵として桂樹を攀づ

館から南方の走馬嶺に登り、

我が子が歩いて行った王孫の路を、北に遠く望む。

我が子はまだ、帰ってこない。

恨んでは桂の樹に攀じ登り、悲しく遠くの路をしばらく眺める。

○参考漢詩… 楚辞「招隠士 淮南小山」の「王孫游ヒテ帰ラズ」「桂枝ヲ攀援シテ聊ク淹留ス」。

十五 白鷺峰 (羽黒峰)

はくろほう

はくろほう



霸陵

寥落白鷺峰

りょうらく

寥落たり白鷺峰

はくろほう

躋攀青春節

せいはん

躋攀す青春の節

せつ

不見白鷺飛

はくろ

白鷺の飛ぶを見ず

とみ

但見松梢雪

た

但だ松梢の雪を見る

しゅうせう ゆき み

白鷺峰は、荒れてもの寂しい。

早春の節に、ゆつくりと登ってみる。

白鷺が飛ぶ姿は見られない。

ただ、松の梢の残る雪を見るだけである。

○参考漢詩… 王維 七言古詩「老将行」の「寥落たり寒山 虚牖ニ対ス」。

咫尺青天外

しせきせいてん そと
咫尺青天の外

嬋娟白鷺峰

せんけん はくろほう
嬋娟たり白鷺峰

欲知奇絶處

きぜつ ところ し
奇絶の処を知らんと欲せば

上有羽人封

うえ うじん ほうあ
上に羽人の封有り

まじかに、青空を超えて天までも高く聳えている。

白鷺峰は、あでやかな姿で美しい。

奇妙で不思議な処がどこかにあるのと知りたい。

峰の上には、羽がはえて天に登る仙人の国があるのだろう。

※羽人：仙人のこと。「羽人於イテ丹丘ニライテ 不死舊郷ニ留マル、・羽人之国 不死之民
有リト」。(楚辞「遠遊」)

○白鷺峰がある山を「羽山」という。山頂には羽黒山の石碑が立ち、順に湯殿山、月山の三石神
が祀られている。

盤谷

天邊明霽色

てんべんせいしよくあき
天边霽色明らかに

寒影映岩扉

かんえいがんび うつ
寒影岩扉に映す

一片孤峰雪

いっぺん こほう ゆき
一片孤峰の雪

還疑白鷺飛

かえ うたが はくろ と
還りて疑う白鷺の飛ぶかと

雨が上がり、大空の果てまでも明るく晴れわたり、

寒寒とした冬空に飛ぶ鳥の影が、扉のような峰の岩に映えている。

あたり一面、高く聳える白鷺峰が雪でおおわれ、

その姿は、あたかも、白鷺が飛んでいるかのようだ。

十六 雫山（請雨山）
うざん しやううざん



霸陵

雫山春雨後

うざん しゆんう あと

春草正萋萋

しゆんそうまさ せいせい

欲望王孫路

おうそん みち のぞ ほつ
王孫の路を望まんと欲すれば

雲深桂樹西

くも ふか けいじゆ にし
雲は深し桂樹の西

雨乞いの祭りをする雫山に、春の雨が降りやんで、
春の若草が、青々と生き生きとする。
我が子が帰って来る王孫の路を、遠く望もうとするが、
西の桂樹の茂る山には、雲が深く立ち込めている。

※雫山・雨乞いの祭りをする山。

○参考漢詩… 楚辞「招隠士 淮南小山」の「王孫游ヒテ帰ラズ 春草生ジテ萋萋タリ」。
「桂樹ハ叢生ス山ノ幽ニ」。

台州

欲試暮春衣

ぼしゆん ころも ころも ほっ
暮春の衣を試みると欲して

携樽向翠微

たる たずさ すいび む
樽を携えて翠微に向かう

春山無限好

しゆんさんかぎ よ
春山限りなく好し

似詠舞雩歸

ふう えい にかえ に
舞雩に詠じて帰るに似たり

晩春に、春服の衣に更えて、

酒樽を携え、山頂からちよつと下がった所に向かった。

春の雩山は、樹木の若葉がとても美しい。雨乞いの祭壇で、

孔子の弟子が詠って帰って来たように、この散策が楽しい。

※詠舞雩歸・孔子の弟子・曾皙が「暮春の良い季節には、春服を着て出かけ、舞雩する高台で涼

風にふかれ、歌でも詠いながら帰ってきたい」と答えた故事。(論語「先進」)

盤谷

雨晴山更青

あめは やまのり あお
雨晴れて山更に青く

日照雲逾白

ひ べい へく
日照らして雲逾白し

長見風光好

とこしなえ み ふうこう よ
長に見る風光の好き

欲著謝公屐

しやこう げき つ ほつ
謝公の屐を著けんと欲す

雨がやんで、山は雨に洗われて一段と青々とし、

晴れて澄み切った青空に、真っ白な雲がくつきりと浮かぶ。

いつまでも、雨上がりの晴れた風光の美しさを見ていたい。

できれば、謝霊運の一本歯の下駄を履いて、天上界に登りたい。

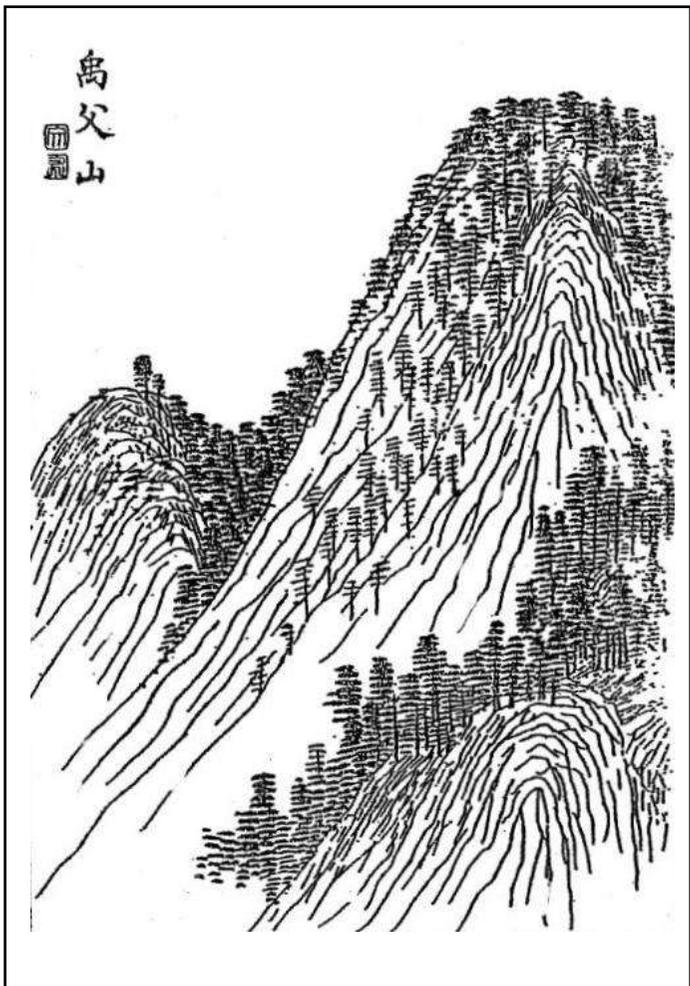
※謝公ノ屐・謝公運が山歩きのため考案した下駄。登るときは前の歯を、降りるときは後ろの

歯をはずして使った。(南史「謝霊運伝」) (李白「夢游天姥吟・留別」)

十七 禹父山 (蔚遲山)

うふざん

うつちざん



霸陵

山頭試騁望

山頭試みに望みを騁すれば

一水抱孤城

一水孤城を抱く

欲問襄陵世

襄陵の世を問わんと欲すれば

空留禹父名

空しく留む禹父の名

山の頂に立ち、眼下に広がる景色を、一望して眺めてみれば、
細く長い一筋の川が、ぽつんと立つ城を抱くように流れている。
大水で溢れていたころの昔は、ここ信達はとうだったのだろうか。
今は、治水で国土を築いたという禹父の名だけが残っている。

※禹・夏の始祖。黄河の洪水を治めて功があり、舜から位を譲られて天子となるという伝説。

○大昔、ここ信夫郡と伊達郡は、大水が出て、水が丘の上まであがり、太湖の底であったという伝説があった。

台州

南登禹父山

みなみ 南のかた禹父山に登りて

遥望鬪龍灣

はる 遙かに鬪龍灣を望む

始信鴻荒世

はじめ 始めて信ず鴻荒の世

蒼波湧此間

そうはこ 蒼波此の間に湧きしことを

南の禹父山に登って、

龍が鬪った湾だったという信達の光景を、遙か遠くまで眺めた。

山から眺望して始めて、大昔のことが信じられた。

この信達に、青々とした波が湧き立っていたことが。

※鬪龍灣・・太古の昔、信達が湖だったころ、熊と鬪って龍が負け逃げ去り、その時湖の水が抜

け田畑が開け村里ができたという伝説から、この信達一帯をさして言う。

(台州 「信達歌」)

盤谷

山中裊裊雲

さんちゆうじゆうじょう 山中裊裊たる雲

雲中藹藹樹

うんちゆうあいあい 雲中藹藹たる樹

遙見牛羊下

はる み 遙かに見る牛羊の下るを

回頭白日暮

こうへ 頭を回せば白日暮るる

信達を囲む山々にゆらゆらと雲が立ちこめ、

雲の中には、樹林がこんもりと茂っている。

はるか向こうの山から、牛や羊が下っていくのが見える。

振り向いて空を見上げると、もう、日が暮れようとしていた。

○参考漢詩… 王維 六言絶句「田園樂七首」の「牛羊自下村巷二帰ル」。

十八 愚公谷 (可樂澤)

ぐこうこく からくさわ



霸陵

一 自耽丘壑

ひと きゅうかく ふけ

一 たび丘壑に耽りしより

幾過幽谷中

いく よぎ ゆうこく うち

幾たびか過る幽谷の中

老來愁路遠

お き みち とお うれ

老い來たりて路の遠きを愁ふ

頗欲學愚公

すこぶ くこう まな ほつ

頗る愚公を學ばんと欲す

丘の合間に繋がる谷の風情が、このうえなく好きで、

幾度も、奥深く静かな谷を訪れては、隠者の境地を楽しんでいる。

老いてきたのか、ここに來る路が遠くに感じ、難儀になった。

すこしは、老いてから山を移したという愚公を見習らおう。

※愚公・「愚公山を移す」の寓話。北山愚公という老人が、長い年月をかけて、自分の家の前の山の土を運んで、ついに山を他の移したという。(列子「湯問」)

獨往愚公谷

どくおう ぐこうこく
獨往す愚公谷

已無適俗韻

すで てきぞく いんな
已に適俗の韻無く

逢人便回避

ひと あ すなわ かいひ
人に逢いて便ち回避す

恐致齊桓問

おそ せいかん と いた
恐らくは齊桓の問いに致さんことを

ひとりで愚公谷に往く。私は、もう、俗世間にはなじめない。

途中で人に逢っても、そのたびに、人に見られたくないと隠れてしまう。

恐らく、逢った人は、齊の桓公が問いかけたように、

「いま、鬼神のように隠れる人を見なかったか」と聞くに違いない。

※齊桓の問い・・・齊の桓公が狩りに出かけた時、鬼神を見る。管仲に「今何か見なかったか」と問うが、何も見ないと答える。桓公は人には見えないものを自分は見てしまつたと悩むという故事。(莊子「達生」)

盤谷

雨歇秋天遠

あめや しゅうてんとお
雨歇みて秋天遠く

風清晚日遲

かぜきよ ばんじつおそ
風清く晚日遅し

谷口鳴蟬急

こくこうめいせんきゅう
谷口鳴蟬急に

山裏叫猿悲

さんりきょうえんかな
山裏叫猿悲し

雨が降りやんで、秋空は遠くにまで広く晴れ渡っている。

涼しい風が吹き、夕暮れはまだである。

谷の入り口では、蟬がせわしげに鳴き、

山の中では、猿の叫ぶ声が悲しげである。

○猿の鳴き声は悲しみを誘うものとして、李白の詩などにもでてくる。

十九 白雲洞 (琉璃窟)

はくうんどう

るりくつ



霸陵

高臥白雲洞

こうが はくうんどう

高臥す白雲洞

閑眠對落暉

かんみんらつき たい

閑眠落暉に對す

欲還出洞口

かえ ほつ せつこう い

還らんと欲して洞口を出づれば

忽見白雲飛

たちま み はくうん と

忽ち見る白雲の飛ぶを

白雲洞で、煩わされずにのんびりしている。

うとうととしていると、いつのまにか夕陽の光が射していた。

帰ろうと思ひ、洞の入り口を出ると、

たちまち、白雲が流れ、飛んで行くのが見えた。

※白雲・青空にぽっかりと浮かぶ白い雲。自由に浮き流れる様から、超俗的な自由な生活の象徴とされる。霸陵は、自分の館を「白雲館」と号した。

朝見白雲迎

あした み はくうん むか
朝に見る白雲の迎えるを

暮見白雲送

く み はくうん おく
暮れに見る白雲の送るを

朝暮白雲在

あした く はくうん あ
朝に暮れに白雲在り

余將老此洞

よまら こ ほら お
余將に此の洞に老いんとす

朝に、白雲が迎え、

暮れに、白雲が送る。

朝に暮れに、白雲はここにある。

余は、白雲洞のあるこの仙境で老いていきたい。

○天帝のいる白雲郷（仙郷）では、天帝は白雲に乗って行き来するということから、「白雲」は仙境をも象徴する。若き台州は上方の文人と交流し、紀行文、漢詩文学、儒学に究めるが、晩年には、この高子での隠逸生活を楽しむ。この高子の白雲洞を仙境とし、ここで老いていくと詠っている。

獨歩幽洞邊

どくほ ゆうどう あた
独歩す幽洞の辺り

山中秋色夕

さんちゆうしゆうしよく ゆう
山中秋色の夕べ

丹楓媚遊子

たんぷうゆうし こ
丹楓遊子に媚び

白雲留過客

はくうんかかく とせ
白雲過客を留む

奥深い白雲洞のほとりを、ひとり歩く。

夕べ、山の中は秋の景色が美しい。

紅葉した楓が、ぶらぶらと歩く私に媚びるように姿美しく、

白雲が、行き過ぎようとする私の足を止めてしまふ。

二十 古樵丘 (扈從山)



霸陵

獨酌古樵丘

独酌す古樵丘

詩成自飄逸

詩成りて自ら飄逸

醉看浮雲過

酔うては見る浮雲の過ぎるを

醒愛明月出

醒めては愛す明月の出づるを

古樵丘で、ひとり酒盃を酌んでいる。

詩ができては、ひとりご満悦で思うままに振舞っている。

酔いながら、流れゆく浮き雲を眺めるのも好き。

酔いが醒め、出ようとするとする明月を眺めるのも愛おしい。

台州

一自樵翁去

ひと じょうおん ひと
一たび樵翁の去りし自り

遺蹤惟古丘

いしょうた こきゅう
遺蹤惟だ古丘のみ

于今明月在

いま せいげつあ
ここに今においても明月在り

依舊白雲浮

きゅう よ はくうんう
旧に依りて白雲浮かぶ

樵の霸陵翁が、世を去ってしまったても、

古樵丘は、翁が訪れたところと同じ面影を残している。

今なお、ここは、月は明るく輝き、

昔日のままに、空には白雲が浮かんでいる。

盤谷

銜杯爽氣来

はい ふく そうききた
杯を銜めば爽氣来り

高枕白雲開

まくら たか はくうんひら
枕を高くすれば白雲開く

偏愛丘中趣

ひとえ あい きゅうちゅうしゆ
偏に愛す丘中の趣

陶然殊未回

とうぜん こと いま めぐ
陶然として殊に未だ回らず

盃を重ねて、さわやかな気持ちになった。

横になり空を見上げると、白雲が開けて浮かんでる。

古樵丘から見る風情は素晴らしく、この上なく好きである。

酔ってうっとりとして、まだ、家に帰る気にはなれない。

◎丹露盤から歸雲窟までは、白雲館の裏山を舞台に「仙境」の世界に遊ぶ詩を詠い、将歸阪から返照原あたりでは、高子の実際の目に映える春秋の素晴らしい光景を詠い、走馬嶺から古樵丘では、霸陵、台州はそれぞれ自分の人生を回顧し、この高子を仙境として生きること詠っている。

(小林敬一「詩に詠まれた景觀と保全」より)

参考文献..

遠藤義治編集 永慕編二十境五言絶句漢詩資料集

(高子二十境を愛する会漢詩を学ぶ会・学習資料)

小林敬一著 詩に詠まれた景観と保全 (西田書店出版)

高子二十境を巡る・・・漢詩と絵から読み解く景観 (大風出版局)

平林有尚著 高子の三学者の墓碑銘訓読について

二十境図並びに詩の解説 (保原中央公民館館報)

松浦丹次郎著 高子二十境く高子熊阪家と白雲館文学 (土龍舎)

菅野 宏著 白雲館二十境雑記 「芸文福島一号」

白雲館のひとびと 「芸文福島二号」

続・白雲館のひとびと 「芸文福島四号」